

Title	最初のグローバル通貨：メキシコ製8レアル銀貨の盛衰(1)
Sub Title	La primera moneda global : Trayectoria histórica del Real de a ocho mexicano
Author	伏見, 岳志(Fushimi, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.33 (2018. ) ,p.211- 237
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20180630-0211">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20180630-0211</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 最初のグローバル通貨

## ——メキシコ製8リアル銀貨の盛衰（1）——

伏見 岳志

16-19世紀にかけて、メキシコ・ドルやスペイン・ドルと呼ばれる銀貨が、世界規模で大量に流通し、各地に大きな影響を及ぼしたことはよく知られている。その世界的影響力の大きさから、「最初の世界通貨」と呼ばれることもある。ヨーロッパについてみれば、スペイン銀貨の膨大な供給が価格革命をもたらしたという通説がある。近年の研究によってこの議論の妥当性には疑問が提示されているものの、少なくとも新大陸産銀が物価上昇を促進する要因のひとつであったことは間違いない [Munro 2003]。また、これら銀貨の多くが、インド洋や太平洋を経由して、やがてアジアに流入したこともよく知られている [Von Grahm 1996; Giraldez 2015]。日本語でも多くの文献があり、16-17世紀の東アジアでの銀流通に関する歴史学的な研究群にくわえて、19世紀後半に新大陸の銀貨に依拠した貨幣体系が解体され、金本位制が構築されていく過程に関する経済学的な研究などがある [小野 2000]。こういう豊富な文献を前にすれば、新大陸産の銀貨については、かなりの点は解明されているように思われる。

しかしながら、明確には説明されていないことがらも多い。例えば、メキシコ・ドルの正式な呼称は8リアル銀貨であるにもかかわらず、なぜ「ペソ」や「ドル」と呼ばれるのか、という素朴な疑問に、明示的に答えた日本語の文献は見当たらない。それに、スペイン・ドルとメキシコ・ドルは同質なのか、単純に製造国の名前が変更されただけなのか、といった両銀貨の関係も検討されていない。さらに、世界に名をとどろかせた、南

米アルトペルー（現ボリビア）のポトシ銀山の銀貨との関係はどうなっているのか、なぜ後者の存在感が小さいのか、といった点も明解には説明されていない。

こうした疑問点が未回答であるのは、つまるところ、メキシコ・ドルについて日本語で体系的に解説した文献がないからであろう。そう判断し、メキシコ・ドルに関する欧語文献を渉猟し、それをまとめることが本研究の当初の目的であった。しかし、欧語文献を検討するうちに、それらの文献にもなかなか答えを見いだせない疑問点があることがわかってきた。まず、スペイン領植民地やそこから成立した独立国家において作成された貨幣全体のなかで、メキシコ製貨幣の占める位置とはなにか、つまりなぜメキシコドルが重要なのか、という問いに明示的な説明は与えられていない。とくに、植民地期と独立期をつなぐような長期的な視点のなかで、このメキシコ製貨幣の役割を考察した議論がない。

そこで、本研究では、メキシコ製銀貨の重要性を、スペイン語圏各地の銀貨、とくに本国やアンデスの銀貨との長期的な関係のなかで考察することを目的としている。つまり、植民地時代のメキシコ製銀貨だけでなく、その起源となったスペイン本国の銀貨や、植民地から独立して以降に製造された銀貨も含めて、検討してみたい。そういう長期的な全体像を描き出すことが、本研究がもたらす新しい知見である。しかし、そういう全体像を構築するために検討すべき論点のすべてに答えるだけのデータは、管見の限りでは手に入らなかった。とくに独立運動期以降についてはまとまった研究が少なく、当時の報告書などの冊子体の史料群も参照したが、かなり粗く穴だらけの見取り図しか描けない。不足点は、本論文のなかで随時言及しているが、今後の検討課題であると思う。また、全体像といっても、硬貨を造幣する側、つまり供給側に分析は限定されており、これを受容する側については議論していない。これも、将来の研究課題である。したがって、本論文は、供給側の論点を整理し、今後研究していくうえで指針となる見取り図を作成することを目的としている。

なお、紙幅の都合で、論文を分割して掲載せざるを得なかった。今回掲載するのは、スペイン本国や植民地で作成された銀貨のなかで、メキシコ製銀貨がどのような位置を占めていたのか、という部分である。独立運動期以降の状況については、次号掲載となる<sup>(1)</sup>。

考察をはじめるとに当たって、このような作業を試みた文献が、スペイン語・英語ですでに何点か存在するので、まず以下にその主なものを発行年順に掲げ、その内容について簡単に紹介したい<sup>(2)</sup>。

1. Humberto F. Burzio. *Diccionario de la Moneda Hispanoamericana*. 3 vols. Santiago de Chile: Fondo Histórico y Bibliográfico de José Toribio Medina, 1958.
2. Manuel Vilaplana Persiva. *Historia del Real de a Ocho*. Murcia: Ediciones de la Universidad de Murcia, 1996.
3. Guillermo Céspedes del Castillo. *Las casas de monedas en los Reinos de Indias. Vol. 1: Las cecas indianas en 1536-1825*. Madrid: Museo Casa de la Moneda, 1996.
4. John J. TePaske (edited by Kendall W. Brown) . *A New World of Gold and Silver*. Leiden: Brill, 2010.
5. Kendall W. Brown. *A History of Mining in Latin America: From the Colonial Era to the Present*. Albuquerque: University of New Mexico Press, 2012.
6. María Teresa Muñoz Serrulla. *La moneda castellana en los reinos de Indias durante la Edad Moderna*. Madrid: Universidad Nacional de la Educación a Distancia, 2016.

---

(1) 研究の実施にあたっては、公益財団法人清明会の研究助成をうけた。本論文はその研究成果のひとつである。ここに記して、謝意を表したい。

(2) 他に、メキシコの8レアル貨に関しては、*El Real de a Ocho* があるが、これは簡潔な歴史紹介と、史料文献リスト、数点の一次史料掲載などカタログ的な性格である。

それぞれの文献の特徴を、この小論との関係に絞って述べたい。1は、こうした研究の草分け的なものであり、事典形式になっている。貨幣にまつわる名称の意味や語源、各硬貨のモノクロ写真などがあり、事実確認をするうえで、便利である。そのいっぽうで、銀貨鑄造の全体像についての総論が欠けている。2は、植民地以前のイベリア半島での硬貨から、植民地時代の新大陸の銀貨鑄造までを概観したものであり、時代や場所による硬貨の形状の変遷を把握するうえで有用である。しかし、生産量などの数量的な情報が盛り込まれていない。3は、スペイン植民地時代の新大陸における、銀貨鑄造の総体を、その起源から植民地末期まで説明したものであり、鑄造制度、工程、鑄造量など、非常に体系的であり、かつ具体的に詳細な記述に富む。この分野では最高峰と呼ぶべき研究である。しかし、1810年代以降の鑄造状況については述べられていないことに加えて、史料的な制約のため、17世紀初頭までの鑄造量の数字が不足している。4は、スペイン植民地時代の銀に加えて、金についても扱っている。しかも、鉱山の掘削と、貨幣鑄造の両方を視野におさめた、網羅的な文献である。ただし、3と同様に、対象となる期間の制約に加えて、鉱山採掘量と貨幣鑄造量の関係についての整理が明確でない。5は、植民地時代以後も射程にいられている点で3と4の時代的な制約を克服している。そのうえ、金銀以外の鉱山業も含められているため、鉱業全体のなかで銀の位置づけを考えるうえでも有用である。ただし、主題が鉱業生産であるため、貨幣鑄造や流通の問題は簡潔にしか触れられていない。最後の6は2と似通っているが、より図式化されており、発行された貨幣の違いや全体像を把握しやすいいっぽうで、発行量や植民地以降の状況などの記述に欠けている。

以上の点を考慮するならば、いちばん解明されるべきは、植民地期と独立以降との連関であろう。これは、より具体的には、スペイン・ドルとメキシコ・ドルとの関係、すなわち両者の持続と切断を把握することである。そこで、本論のうち、今回掲載する前半部では、植民地の銀貨についての知見を整理する。そのうえで、次号掲載の後半部では、独立期の銀貨に関

する知見を整理し、両者を統合して考察したい。この作業を通じて、新大陸、とくにメキシコの銀貨鑄造と流通の長期的な理解を試みたい。

## 第1章 スペイン・ドルとは何か

メキシコ・ドルは、スペイン・ドルの後継貨幣に位置づけられる。したがって、最初に答える必要があるのは、スペイン・ドルとは何か、という問いである。スペイン・ドル (Spanish Dollar) は、スペインの支配地域で鑄造されていた「8レアル銀貨 real de a ocho」に対する英語圏での俗称 (正確にはそれを日本語化したもの) である。スペイン語圏では、「8レアル銀貨」以外に「ペソ peso」「ペソ・デ・ア・オチヨ peso de a ocho」という俗称もある。後者は、英語では転訛して、ステイブンスンの『宝島』に登場するオウムが叫ぶ有名な「ピース・オブ・エイト pieces of eight」という表現になった。

以上のことから、①8レアル銀貨とは何か、②なぜペソという俗称があるのか、③なぜ英語圏ではドルと呼ばれるのか、という3点について答える必要がある。

### 1-1 8レアル銀貨とは何か

8レアル銀貨を理解するにあたっては、「レアル real」という貨幣単位について説明する必要がある。レアルはもともと、14世紀にカスティーリヤ王国王ペドロ1世の治世 (1350-1367年) に発行が始まった銀貨「レアル」に由来する<sup>(3)</sup>。したがって、貨幣単位ではなく、特定の銀貨に対する名称として登場した。

(3) 先行するレオンやカスティーリヤ王国、両者が合体したカスティーリヤ・イ・レオン王国も含めて、カスティーリヤと表記する。なお、カスティーリヤは、イベリア半島中部に広がる王国である。1479年に同国が、半島東部の地中海沿岸を支配するアラゴン王国と連合して誕生したのが、スペインである。しかし、政治や法、貨幣などの諸制度の多くは、その後も長らく統一されず、各王国で異なったままであった。

13世紀までのイベリア半島では、純度が高く厚みもある質の高い銀貨は、いくつかの試みを別にするると恒常的には発行されておらず、対外的な取引には主に金貨が用いられていた。代表的な金貨としては、イスラーム系王朝が発行していた1ディナール金貨、もしくは2ディナール金貨（通称ドブラ *dobla*）や、これらをキリスト教系王朝が模倣した金貨が挙げられる。1ディナール金貨は、これを多く発行していたイスラーム系ムラービト朝（1040-1147年）にちなんで、俗に「マラベディ *maravedí*」と呼び習わされ、これに倣ったカスティーリャ王国のコインも「マラベディ」や「モラベティーノ *morabetino*」と呼ばれた。やがて、ムラービト朝タイプの1ディナール金貨が実際には造幣されなくなった13世紀以降になると、マラベディは実在の金貨ではなく、カスティーリャ王国の通貨単位の名称として定着するにいたった [Remie Constable 1996: 50, 199-203]。

14世紀半ばに、新たに銀貨リアルが発行された背景には、カスティーリャ王国が、金貨を基本とするイスラーム圏を離れ、銀貨の使用量が多いキリスト教ヨーロッパ圏の貨幣体系に移行しつつあった状況がある。13世紀の中部ヨーロッパでは、銀鉱山の開発が進展し、純度が高く重量のある銀貨の造幣が可能になった。これらの銀貨は、従来のものよりも厚いため、「厚み」を意味するグロート、グロ、グローシュ、グローシェンなどの単語で呼ばれるようになった。イベリア半島でも地中海側のアラゴン王国では、13世紀末にはクロアトと呼ばれる銀貨が作成されている。カスティーリャの場合、「リアル」は「王の」を意味するから厚みを表現しているわけではない。しかし、純度が高く重量と厚みがある銀貨という点では、このヨーロッパの趨勢に遅ればせながら倣ったものだと考えられる。13世紀以降のカスティーリャでは、フランスやイタリア方面への貿易赤字によって金貨が流出するいっぽうで、巡礼の活発化などによるフランス方面からの銀貨の流入があり、銀の流通量が増加しつつあった。おそらく、これが銀貨鑄造を可能にした [Spufford 1988: 225-239]。

ペドロ1世時代の1リアル銀貨は、当時は貨幣単位として用いられてい

たマラベディで換算すると、3マラベディであった<sup>(4)</sup>。その後、戦費捻出を主たる目的とした度重なる悪鑄によって物価上昇がおり、マラベディの価値は大きく下落する。例えば、1350年には20マラベディで入手できたフィレンツェの1フィオーリーノ金貨は、1480年には375マラベディの値がつくにいった [Spufford 1988: 314-316]。このため、カトリック両王は貨幣制度を再定義するために、1497年に大市が開催されるメディナ・デル・カンボで布告 *real pragmática* を発し、マラベディに変えてレアルを基本的な通貨単位として位置づけた。以来、レアルという名称は、スペインでは通貨の基本単位として1864年まで利用され続けることになる<sup>(5)</sup>。

この1497年の布告では、1レアルは、重量単位1マルコ *marco* の銀を、67等分したものと定められている。この67レアル = 1マルコという比率自体は、14世紀にペドロ1世がレアルを導入した際とほぼかわらない<sup>(6)</sup>。いっぽう、それまでの基本単位であったマラベディ *maravedí* は、レアルの補助的な単位として位置づけられ、34マラベディ = 1レアルという比率に設定されている。

では、1レアルは、現在の重量単位に換算すると、どうなるか。この場合の1マルコは、西ヨーロッパで広く用いられていたケルン・マルク（約230グラム）にほぼ等しい。したがって、1レアル銀貨の重さは、その67分の1、すなわち  $230 \div 67 \approx 3.433$  グラムとなる。

ただし、この場合の銀は、純銀ではなく、品位11ディネロ *dineros*・4グラノ *granos* と定められた。このディネロ *dinero* という単位では、12ディネロが純銀をあらわす。すなわち現行の千分比に換算すると、1ディネロは  $1000 \div 12 \approx 83.33$  パーミルにあたる。その補助単位であるグラノ *grano*

(4) 本論考では、スペイン語をカタカナ表記する際には、単数形と複数形を区別せず、つねに単数形で表記する。いっぽう、スペイン語をアルファベットで表記する際には、単数形と複数形は区別して、表記する。

(5) その後は、1869年にペセタ *peseta* を基本とする貨幣体系に移行している。

(6) 正確には、ペドロ1世の時代には、66レアル = 1マルコであったが、ここに鑄造手数料として1レアルがつけかわった。

は、1ディネロを24分割したもので、 $1000 \div 12 \div 24 \approx 3.472$ パーミルに相当する。つまり、11ディネロ4グラノは、 $1000 \div 12 \times 11 + 1000 \div 12 \div 24 \times 4 \approx 930.55$ パーミルである。したがって、1レアル銀貨3.433グラムに含まれる銀は、 $3.433 \times 930.55$ パーミル $\approx 3.1946$ グラムということになる。

この布告にしたがって、カステイーリャの4つの造幣所<sup>(7)</sup>で、銀貨が製造されるようになった。当初の額面は、1レアル、1/2レアル、1/4レアル、1/8レアルの4種類であり、それぞれの鑄造割合は最初の2種類が3分の1ずつ、残りの2つが6分の1ずつであった [Nueva Recopilación Lib. 5, Tit. 21]。その後、カルロス1世の時代になると2と4レアル銀貨、1550年代には、8レアル銀貨の造幣もはじまった。

やや遅れて、新大陸にも造幣所が設置され、銀貨の発行がはじまる。最初の造幣所は、1535年にメキシコ市に開設され、その後リマ（現ペルー：1565年）、銀山のあるポトシ（現ボリビア：1574年）、パナマ（1578年）、ボゴタ（現コロンビア：1620年）が続いた。18世紀には、さらにヌエバ・グラナダ副王領のポパヤン（現コロンビア：1729年）、グアテマラ（1731年）、サンティアゴ・デ・チレ（現チリ：1743年）にも造幣所が設けられている。

「ペソ peso」と呼び習わされるのは、これらの新大陸側の造幣所で作られた銀貨のうち、8レアル銀貨である。

## 1-2 なぜ8レアル貨は「ペソ」と呼ばれたのか

「ペソ」は重さを意味する単語である。それにもかかわらず、この単語が貨幣の名称として使われるようになったのは、新大陸側の事情による。初期のスペイン領アメリカで交換手段として用いられたのは砂金などであり、その交換価値は重量によって決められていた。そのため、重量を表す「ペソ」は、金貨の単位としても用いられるようになった。やがて銀鉱山が大

(7) 北から、ブルゴス、セゴビア、トレド、セビリアの4ヶ所。

規模に開発され、銀貨が主流となるにつれて、この「ペソ」は銀貨の単位としても転用されるようになる。以下では、この経緯について、セスペデス・デル・カスティジョの研究に依拠しながら、もう少し詳しく説明する[Céspedes del Castillo 1996]。

スペイン人がカリブ海に植民地を構築しはじめた当初は現地には铸造所がなく、貨幣はスペイン本国から持ち込まれていた。しかし、持ち込まれる硬貨の量は少ないうゑに、本国と比べて30%近くプレミアムがあったため、流通量はごく限定的であった。そこで、実際の交換には現地で獲得された砂金などが用いられていた。メキシコやペルーなどの大陸部の征服が進展するにつれて、この不足状況はさらに深刻化し、各地で多様な実物貨幣（綿布やカカオなど）の利用が試みられた。実物貨幣のうち、とくに広く受容されたのが、金と銅が混在する金属片である。この金属片は大きさも純度もバラバラであり、王室が派遣する財務役人の検査や徴税をうけないまま流通するものが多く、「通俗金 oro corriente, oro común」と呼ばれていた。

実際の通俗金にはバラツキがあるため、その解決策として、やがて「通俗金ペソ peso de oro corriente」という計算単位が導入されている。ただし、この計算単位の呼称は地域ごとに少しずつ異なる。本稿が主眼とするメキシコの場合は、征服後の早い段階（1526年頃）から通俗金ペソにくわえて、「テプスケ金ペソ peso de oro de tepuzque」という表現が使われている。テプスケは先住民ナワ語で金属、とりわけ銅を意味する「テプストリ tepuztli」が訛った表現である。導入当初は、このテプスケ金ペソの価値も変動していたが、1536年には272マラベディに固定された。したがって、初期のスペイン領アメリカ各地では、硬貨に加工されず、純度も低くてバラツキがある金属片が、交換手段として広く用いられるいっぽうで、これらを換算する単位として「通俗金ペソ」がもちいられていたことになる。

しかし、1530年代にはいと、メキシコではタスコで銀鉱が発見され、1548年にはメキシコ最大のサカテカス銀鉱の開発もはじまり、金よりも銀

が豊富に入手できるようになる。同じ頃1535年には、メキシコ市に造幣所が開設されている。勅令によって、金貨の製造は禁止され、銀貨と銅貨の造幣のみに限定された。ただし、銅貨の製造は拡大せず、メキシコで造幣される硬貨は主として銀貨であった。額面は、初期には1/4リアル、1/2、1、2、3、4リアルであったが、1570年代になると8リアル銀貨も造幣されるようになる。

先述のとおり、1リアル銀貨は34マラベディの価値があるため、8リアル銀貨であれば272マラベディに相当する。これは1536年に定められた「1テプスケペソ」に等しい。このため、計算単位である「ペソ」が実在する「8リアル銀貨」を指示する表現として用いられるようになったと考えられる [Seeger 1978]。

### 1-3 なぜ「ペソ」はスペイン領域外で「ドル」と呼ばれるのか

では、この「ペソ」はなぜ「ドル」と呼ばれるようになったのだろうか。ドルという英単語（正確には、それが日本語化した語）は、神聖ローマ帝国のボヘミア地方で鑄造されていた各種銀貨が「ターラー thaler」と呼ばれていたことに由来する。ボヘミアやチロル、ザクソン地方では13世紀から銀鋌の開発が始まり、とくに15世紀末にはその生産量が大きく拡大した。この結果15世紀になると、13世紀のグロート銀貨よりも、さらに額面の大きい銀貨の鑄造が可能となった。このうち、16世紀初めに、ボヘミア地方のヨアヒムタール（現チェコ共和国ヤーヒモフ）で発行されていた銀貨は、ヨアヒムターラー joachimsthaler と呼び慣わされるようになった。なお、「タール thal」はドイツ語で「谷」を意味する。1566年には、神聖ローマ帝国の銀貨にもこのターラーという表現が導入され、帝国ターラー reichsthaler として規格化された。この結果、その周辺地域であるスカンディナヴィアやオランダ、さらには英語圏でもターラーの現地化した表現、オランダ語ならダールダー、英語圏ならばダラーが、高純度で大型の銀貨を指示する表現として定着していったと考えられる。

8リアル貨は、このヨアヒムターラーをはじめとする中欧の高額銀貨と品質に近い。一説では、神聖ローマ帝国皇帝を兼任するスペイン国王カルロス1世が、こうした中欧の銀貨を念頭において、そのスペイン版として8リアル貨の造幣を命じたとされる [Ruíz Trapero 364]。ターラーと8リアル貨の近似性は、両者を比較するとよくわかる。例えば、帝国ターラーは1マルクの8分の1の重量のため、29.23グラムに相当する。また、銀の純度は9分の8に設定されていたため、銀の含有量はおよそ25.98グラムとなる。これは、スペインの1ペソ、すなわち8リアル銀貨の重量27.5グラム、銀含有量が25.6グラムにかなり近い数値である。おそらく、この類似性が、8リアル銀貨が英語圏ではドルと呼び習わされるようになった理由であろう。

以上の論点をまとめて見るならば、8リアル=1ペソ銀貨は、「高純度で大型の銀貨」であるターラー銀貨と等価なものとして捉えられたため、「ドル」と呼ばれるようになった、ということになる。

## 2章 メキシコ産8リアル銀貨に対する信用

### 2-1 新大陸産8リアル銀貨の流通量の多さ

次に、この銀貨が高い評価を獲得した理由について考えてみたい。重要な理由のひとつとしては、スペイン領アメリカの銀は産出量が多く、広く流通していたことが挙げられる。16世紀半ばから新大陸各地で銀鉱脈が相次いで発見されたことは、確認するまでもない。その結果、新大陸産の銀は、16-18世紀には世界全体の産出量の3分の2強を占めるにいったと推定される<sup>(8)</sup>。しかも、スペイン領アメリカ産銀の相当な部分が、域外に流出している。どの程度が流出したかについては正確な把握は難しいものの、公的記録による捕捉率が高いと考えられる17世紀前半に関する試算では、銀産出量の60%超が、大西洋経由でスペインへと持ち出されていた。

(8) 産出量については、2-3節で検討する。

いっぽう、太平洋をつうじたフィリピン向け送金は、公的記録で把握できる範囲では、最大で産出量の10%程度である。これらに、捕捉されていない流出分も考慮すると、少なくとも全産出量の80%前後が域外に流失していたと推測される。

ただし、その全てが、硬貨の形態で流出したわけではない。採掘された銀の原鉱石は、まず一次製錬されて低品位の銀塊 *plata pīna* となり、さらに法定品位を有するインゴット *barra* に鑄造され、最後に硬貨に加工される。したがって、銀の形態には、銀塊、インゴット、硬貨の3つを想定する必要がある。

3種類それぞれが占める割合は、どの程度であったのだろうか。低品位の銀塊は、王室が公認していない課税前の状態であり、採掘した地域からそのまま持ち出すことはできないし、まして本国やフィリピンへ輸出することは禁止されていた [Recopilación Lib. VIII, Tit. X, Ley X; Lib. IX, Tit. XXXIII, Ley LXVIII]。このため、流出した銀全体に占める割合は低い、とする見解がある。しかし、アンデス地域に関する研究では、1680年代でもポトシやその近隣銀山で産出された銀が積み出されるアレキバやアリカの港では、銀塊やこれを加工した食器類の輸出が多いため、副王が禁令の確認をおこなっている。のちの推計では、アンデスからパナマへの銀の輸送船には、常にペソで評価して400万ペソを超える銀塊や加工品が積みおおり、そうした状況は18世紀前半まで続いたという [Lazo García 1992: T. 2 126-129]。メキシコについては、管見の限りでは同様の分析は見当たらないので、今後の検討課題であろう。

では、王室の課税が済んだインゴットについてはどうか。インゴットを支払いに利用したり、域外へ持ち出したりすることは禁止されていなかった。16世紀後半のメキシコからの輸出記録では、銀の輸出額全体のうち44%がインゴット、56%が銀貨で構成されていた [AGI, MEXICO, 68, R. 26, N. 89]。17世紀については、各輸送船団の輸出額全体に占めるインゴットの割合を明示した集計記録は見つからなかったが、個別の商人の記録を眺

める限りは、やはりインゴットの積荷は数多い。アンデス地域についても集計記録は見つけられなかったが、1631年の輸出記録では、王室向けに本国に送られた銀のほとんどはインゴットであり、銀貨が占める割合は6.5%にすぎない。したがって、この頃には銀貨として流出する割合は、それほど多くなかったといえる。

ところが、17世紀後半になると、少なくともアンデス地域では、王室は本国向けの貴金属はすべて銀貨に加工したうえで輸出することを求めるようになる。さらに、18世紀にはいと、域内での納税に対しても、インゴットではなく銀貨をもちいることが推奨された。時代が下るにつれて産銀が銀貨に加工される比率が高まっていることは、銀産出量と銀貨発行高を比較するとよくわかる。17世紀前半の公的記録に依拠した数字では、メキシコの銀貨発行高は銀生産量の67.6%である。いっぽう、同時期のアンデスでは、この比率が28.8%と低い。したがって、この時期のメキシコでは産出銀が硬貨に加工される割合が、アンデスよりも高かったことになる。ただし、両地域の差は徐々に解消されている。17世紀後半の数字を見ると、メキシコが70.5%に対してアンデスは70.5%、18世紀はメキシコの109.8%に対してアンデスが104.5%となって、同等である。18世紀の数字が100%を超えているのは、銀貨発行高に改鑄された硬貨も含まれるためである。改鑄を除いた比率の算定は難しいが、セスペデス・デル・カスティリヨは、銀生産量と銀貨発行高の成長率の違いに着目して、17世紀末までには、およそ9割が硬貨に加工されるようになった、と判断をくだしている[Céspedes del Castillo 2005: 1754]。

以上の検討をまとめると、世界の産出量の3分の2を占めた新大陸産銀は、その8割が域外に流出しており、とくに17世紀末になると、硬貨の形態で流出する割合が9割にのぼったことになる。この推計が正しければ、世界に流通する銀のなかで、スペイン領アメリカ産の銀貨が占める割合は大きく、とくに18世紀にはその存在感が大きかったことはいふまでもなく。

しかし、硬貨にもさまざまな種類がある。そのなかで、8レアル銀貨が

占めた比率は、いかほどであっただろうか。この点に関しては、ロマノが提示した18世紀後半のデータが明解である [Romano 1998: 116-119]。メキシコにおける銀貨発行高のうち、およそ9割が8レアル銀貨で占められている。アンデス地域の分析はさらに詳細である。1683年の副王令では、リマの造幣所では、全体の75%を8レアル銀貨、12.5%が4レアル、8.3%が2レアル、4.2%が1レアル、として造幣するように定めている。実際の数値でも18世紀半ばまでの8レアル貨の造幣割合はほぼこれに沿っており、幣制改革のあった18世紀後半にはその割合は95%に達している。ポトシの場合は、8レアル銀貨の比率は1680年から1760年にかけては75%前後から65%近くまで低下傾向にあるが、その後はやはり95%近くまで比率が高まっている [Lazo García 1992: T. 2 138-145]。8レアル銀貨の比率が高くなる理由のひとつは、同じ額ならば、枚数が多い少額貨幣よりも、高額貨幣のほうが加工の手間が少ないため、時間的にも費用的にも効率的であるためである。

以上の論点をまとめると、新大陸産の銀は、世界全体に占める産出比率が高いうえに、その多くが域外に流出していたことになる。しかも、産銀のなかで硬貨、とくに8レアル銀貨に加工される割合は18世紀になるとより高まる。したがって、8レアル銀貨の流通量が多かったこと、これが世界各地で信任されたひとつの理由である。

## 2-2 8レアル銀貨の品質の安定性

もうひとつ8レアル銀貨の信頼性を支えた要素として、比較的品質が安定していたことを指摘したい。先述のとおり、銀貨の品位は1497年の勅令で、11ディネロ dineros・4グラノ granos (930.6パーミル)と定められた。また、1566年にはデザインは、表面に王家の盾型紋章、裏面に十字架を刻んだものとされた(論文末の図3を参照されたい)。この品位とデザインは、新大陸の場合には、1732年に至るまで変更されていない<sup>(9)</sup>。

ところが、スペイン本国の状況は、新大陸とはおおいに異なる。本国で

は、まず1642年に銀貨を切り下げる試みがおこなわれている。この試みは短期間で撤回されたが、1686年にはふたたび同様の措置がとられている。この結果、新しい1レアルは、1マルコの67分の1から84分の1に引き下げられた<sup>(9)</sup>。

引き下げの原因を辿ると、スペイン本国で造幣されていたベジョン貨の改鑄につきあたる。スペイン本国では、銀貨のほかにも、金貨やベジョン貨と呼ばれる硬貨が発行されていた。ベジョン貨とは、銅と銀の合金を素材とする小額硬貨であり、国内の小額取引の便を図るために発行されていたものである。こうした小額の合金硬貨はヨーロッパ各地で中世以来発行されており、日本語ではフランス語由来でピロン貨と呼ばれている。イベリア半島でも中世から発行されていたが、1497年の王令でレアル銀貨が定義された際に、ベジョン貨の重量や純度、額面、発行量なども規定しなおされた。ところが、このベジョン貨は、1602年以降は、銅のみで造幣されるようになり、発行高も急増する。このため、実際のレアル銀貨との交換条件が悪化した。1686年のレアル銀貨の改鑄は、この銅貨との交換比率を現実に即して定義し直すことを目指したものである。

この改革によって、スペイン本国では、新レアル貨と旧レアル貨の2種類が流通することになった。両者を区別するために、新レアル貨は、デザインが変更され、裏面の上半分に十字架、下半分に聖母マリアを表すMとAを組み合わせた模様があしらわれた。また、旧レアル貨には、新レアル貨よりも約25%多く銀が含まれるため、価値も25%上乘せされた。つまり、旧8レアル貨は、新たなスペイン本国の貨幣体系では、8レアルと表記されているにも関わらず、10レアルに換算されることになったのである。

---

(9) 盾型紋章のデザインは、ブルボン王朝の成立に伴って変更されている。

(10) 正確に言えば、1642年の改革では、1マルコあたり83と4分の1枚の銀貨が作成され、しかも額面が2レアル以下のものに限られていた。1686年の改革は、1マルコあたり84枚で全ての額面に適用された。

この改革は、あくまでもスペイン本国のみで導入されたものであり、新大陸には適応されなかった。したがって、スペイン本国での体系に従えば、新大陸産の銀貨は、いままでと同様の品質が維持された旧リアル銀貨であり、スペイン本国产に対して25%価値が上乘せされることになる。これは、新大陸製リアル銀貨の相対的な評価を高めることにつながる。

ただし、新大陸製の銀貨は、スペイン本国製の銀貨に比して銀含有量が低いとはいえ、コインとしての完成度はけっして高いものではなかった。当時の造幣技術は16世紀以来のいたって素朴なものである。すなわち、インゴットを切断したものを打ち延ばし、その縁を丸く切り取って、デザインを打刻する。その過程がすべて職人の手作業でおこなわれていた。このため職人の習熟度によって、インゴットの切断工程では、切片ごとに重量が異なり、丸く切り取る工程でも、切断される量や形にバラツキが生じるうえ、打刻も不鮮明なことが多かった。また、流通する過程でも、損耗や故意の削り取りが起きやすいため、一枚一枚の価値は大きく異なった。これらの不揃い銀貨は、俗にマクキナ macuquina 硬貨と呼ばれていた(図3)。

完成度が低いことや、品質にバラツキがあることは、マクキナ銀貨の信頼性を損なっただろうか。損なっている、という指摘もある。しかし、流通が多く認知度が高いため、各硬貨の品質は一目瞭然であり、バラツキはさほど問題にはならなかった、という意見もある。形状や重量が大きく損なわれている場合には、受け取る側がすぐに判別し拒否することが可能だった、というのである [Céspedes del Castillo 2005: 1759]。ただし、この見解は、データの裏付けがないので、検証する必要がある。

18世紀になると、造幣技術上の問題点は改善がはかられている。1728年の勅令では、それまで民間に譲与されていた造幣所が官有化された。同時に、ヨーロッパで普及していた造幣機械が導入された。これによって、より正円に近く、明確な刻印が施された銀貨が作成可能になり、品質のバラツキは減少した。さらに、側面に縄模様 cordoncillo を刻むことで、削り

取りの防止が図られた。こうした工夫によって、銀の含有量が少なく基準を満たさない銀貨が流通する可能性は低下した。また、デザインも一新され、表面に王家の紋章を刻み、裏面には海上に地球とこれをはさむ二本の柱をあしらったものに変更された（図4）。この改善によって、マクキナ銀貨につきまとう、バラツキや削り取りで揺らぐ信頼性という問題はかなり解消されたと言って良い。

しかし、この改革は良い面ばかりではなく、品質向上と引換に、品量と品位の低下がはかられている。1728年の勅令を受けるかたちで、1732年には1マルクあたりのレアルの枚数が67枚から68枚に増やされ、品位が従来の11ディネロと4グラノ（930.6パーミル）から11ディネロ（916.7パーミル）に引き下げられた。つまり、8レアル硬貨1枚あたりの銀の含有量は25.56グラムから24.79グラムに減少した。

1772年には、再びデザイン変更がおこなわれている。今回は、表面に国王の右向きの胸像をあしらい、裏面には王権の紋章とこれをはさむ二本の柱を刻んだデザインになった（図5）。そのいっぽうで、密かに品位の引き下げもおこなわれている。1771年の通達で、まず10ディネロ20グラノ（902.8パーミル：24.43グラム）に引き下げられ、さらに1786年には10ディネロ18グラノ（895.8パーミル：24.24グラム）に引き下げられている（図6）。つまり、1786年以降の8レアル銀貨は、1732年より前のものと比較して、94.8パーセントしか銀が含まれていないことになる。

1732年にはじまる品質向上と品位低下のどちらが大きく評価を左右したかは、判断が難しい問題である。セスペデス・デル・カステイーリョは1732年の改鑄で、新大陸貨幣は信頼性を損ない始め、1771年の改鑄とブラジルでの金採掘量の拡大によって、没落が決定的なものになったと考えている [Céspedes del Castillo 2005: 1760]。そのいっぽうで、少なくとも1732年の改定は、新大陸産8レアル銀貨の評価を高めたとする立場もある [Romano 1998: 109]。いずれの意見が妥当なのか、この点を判断するには、硬貨を使う側、つまりはスペイン領アメリカ域外での評価を検討する

必要があり、本稿で扱う範囲を超えてしまう。しかし、少なくとも1732年製の銀貨と、1771年以降のものを比較すると、前者がより高い評価を獲得したことは推測できる。

品質や品位に加えて考慮すべきは、それぞれの銀貨の流通量である。発行高の観点から見ると、18世紀は銀貨の大増産の時代とみることができ、17世紀と比較すると、18世紀の銀生産量は1.48倍、銀貨発行高は2.7倍に膨れあがっている。しかも、防衛支出などでカリブ海やヌエバ・エスパニーヤ北部（現在のアメリカ合衆国南西部）地域への流出が増加し、そこから密輸などによってスペイン領域外に流出したことを考えると、域外での流通量は飛躍的に伸びたと考えられよう。したがって、流通面から考えれば、1732年以降に発行された銀貨は、それ以前のいわゆるマクキナ銀貨よりも、はるかに認知度の高い銀貨だった、と考えられる。

以上を総合すると、新大陸製のいわゆるペソ銀貨、すなわち8レアル銀貨に対する信頼を理解するには、流通量と品質の2つの要因を考慮する必要がある。16世紀から大規模に流通していたペソ銀貨は、18世紀には、より品質が安定し劣化しにくいデザインで、さらに大量に流通するようになった、ただし、18世紀の新銀貨は品位が低下している点を、どこまで勘案すべきか、これは今後の課題である。

### 2-3 新大陸製銀貨全体におけるメキシコ製銀貨

次に、メキシコ製の8レアル銀貨が、新大陸製銀貨のなかで占めた重要性について考察したい。スペイン領アメリカの銀山として、最もよく知られているのは、おそらくポトシ銀山であろう。この銀山は、当時のアルトベルー地方、つまり現在のポリビアに位置している。16世紀半ばに開発がはじまると、急速に生産量をのぼし、最盛期には世界の総産銀量の4割以上に達したとみられる。このポトシ銀山を擁するアンデス地域は、17世紀前半にはメキシコ全体の1.5～2倍の産銀量をほこっていた。したがって、常識的に考えれば、アンデス製銀貨のほうが、メキシコ製よりも流通量が

大きそうである。

ところが、同じ時期の貨幣発行高を検討すると、両者の差は、産銀量ほどではない（図1）。17世紀最初の20～30年間では、むしろメキシコの発行高がアンデスよりも多いくらいである。その理由は、ポトシで産出した銀は、インゴットの形態で流通することが多く、銀貨に加工される割合が小さかったことにある。この点は2-1で説明したとおりである。

これに加えて、17世紀前半のポトシでは、公定の純度や重量に達していない銀貨が造幣されていたことも、アンデス製銀貨に対する信頼度を損なった。すでに述べたとおり、アンデス地域の造幣所はリマとポトシの2カ所に設置された。しかし、リマの造幣所は1588年までには操業を停止し、その後はポトシのみが操業する期間が続いた。ポトシでは造幣に関わる役人が「中抜き」をしており、同地製の銀貨の品質が低いことはよく知られていた。背景には、副王府ポトシがリマから遠く、国家上層部の役人に対する監視も行き届かないことがあったとされる [Lane 2015]。このため、ポトシ製銀貨に対する受取拒否がヨーロッパでもおこり、スペイン本国ではその回収と再鑄造を余儀なくされている。17世紀半ばには、大西洋貿易の決済では、ペルーではなくメキシコ製の銀貨で支払うことを求めた契約書なども作成されている。したがって、この頃のメキシコ製銀貨に対する信頼は、ペルー製よりも高かったといえる。

17世紀後半になると、アンデス地域での銀貨の品質の建て直しが図られる。まず、ポトシ製銀貨の造幣工程の調査がおこなわれ、責任者の処罰がおこなわれている。さらに、長らく休業状態だったリマの造幣所を再稼働させ、銀貨のデザインも一新することで、ポトシとは距離をおいた造幣体制が構築された。これに伴って、アンデス地域では、インゴットを銀貨に加工する動機が強まり、17世紀末にはメキシコと同等レベルまで造幣比率が高まったことは、すでに見たとおりである。絶対的な発行高でみると、1651-1700年のメキシコの発行高が1億6321万6027ペソであるのに対して、ポトシとリマをあわせたアンデス地域の合計は1億8790万7595ペソであり、

アンデスがメキシコを上回っている。この点からすれば、17世紀後半にはアンデス製銀貨は、質的にも量的にも、その信頼性を回復する可能性を秘めていたはずである。

ところが、アンデス製銀貨の発行には、さらなる足かせがあった。同地域の銀産出量が減少したことである。これは、ポトシ銀山の重要性を考えると奇妙に聞こえるかもしれない。しかし、ポトシの採掘量の最盛期は16世紀最後の10年間であり、年平均およそ700万ペソ（約175トン：全世界生産の42%）に達しているが、そのあとは長い衰退期に入り、17世紀末には最盛期の3分の1まで減少している。アンデス全体では、ポトシ以外の鉱脈の発見もあって、1630年代までは生産量が拡大（約860万ペソ：215トン）したものの、その後は減少傾向に転じ、17世紀末にはピークのほぼ半分（約435万ペソ：108トン）になり、1710年代には3分の1（約280万ペソ：70トン）にまで落ちこんでいる（図2）。産出量減退の原因についてはさまざまな議論があるが、アンデスの鉱山は、ポトシをはじめとして長年にわたって操業している場所が多いため、採掘コストが上昇したことがある。採掘が進むにつれ、純度の低い鉱石が増えたうえ、坑道もより深く掘ることが必要になり、従来の方法では採掘効率が低くなったのである。いっぽう、新たに見つかった鉱山は、その多くが小規模のうえに、地理的に分散しているため、持続的な採掘は難しかった。このため、17世紀半ばまでには、アンデスの銀採掘は採算が取れない事業になっていた。18世紀になると、1736年の減税措置によってポトシの産出量が緩やかに回復したことや、副王府リマの北方にあるパスコで豊富な銀鉱脈が発見されたこともあって、アンデス全体の産銀量は増産に転ずる。18世紀末になると、従来の最盛期だった1630年代をやや上回る870万ペソに達した。しかし、17世紀半ばから100年近くも、アンデス地域の産銀量は停滞していたのである。

もちろん、17世紀の産銀量の減少は、アンデス地域に限ったことではなく、メキシコでもおこっている。最大の銀山サカテカスについてみると、

その生産量は1620年代の年平均194万ペソ（49トン）が頂点で、世紀末には半分の101万ペソ（25トン）に減少している。地域全体の生産量も落ちこんでおり、1610年代のピーク（512万ペソ：128トン）のあとは、1640年代には340万ペソ（85トン）に落ちこんでいる。メキシコ産銀停滞の背景には、アンデスと同じ要因に加えて、精錬に必要な水銀の供給価格の高騰がある。アンデスでは、同地域のワンカベリカ鉱山の水銀が利用できたのに対し、メキシコの場合はスペインのアルマデン、時には中欧のイドリア産（現スロベニア）の水銀に依存していた。このヨーロッパ産の水銀の価格が、1630年代から急騰したのである [Gil Bautista 2015: 81-84]。

しかし、メキシコの産銀量の停滞期間は長く続かず、1670年代には早くもそれまでのピークだった1610年代の数値を上回るようになる。これは、アンデスと比較すると、圧倒的に早い。18世紀になっても生産量は拡大し、アンデスの産銀量がもっとも落ち込んだ1710年代にはその倍以上である647万ペソ、世紀末には1989万ペソにまで成長している。

増産の理由のひとつは、1670年代にヨーロッパ産の水銀価格が下落し、アルマデンで新鉱脈が発見されたこともあいまって、水銀の供給量が大きく拡大したことであろう。さらに、メキシコ地域の産銀上の特徴として指摘できるのは、複数の有力な銀鉱山が位置していたことである。1540年代から稼働し続け地域最大の総産出量を誇ったサカテカスに加えて、同じ時期から操業していたパチューカ地方の諸鉱山、17世紀初頭から産出が急増するバラルをはじめとする北部諸鉱山、同時期に鉱山開発が始まるサン・ルイス・ボトシ地方、18世紀後半にメキシコ最大の銀鉱となるグアナフアトなどの著名な銀鉱地域などを筆頭として、大小さまざまな銀山が植民地期を通じて発見・採掘され続けた。これが、メキシコ全体の産銀量が激減せず、なおかつ植民地後半に拡大し、アンデス地域のそれを凌駕した重要な要因であった。

メキシコの銀生産量の拡大にともなって、18世紀初頭にはメキシコの銀貨発行高（年平均553万ペソ）は、アンデス（324万ペソ）を上回る。それ

以降もメキシコとアンデスの差はさらに拡大し、18世紀末には、メキシコの発行高は年間2223万ペソにまで成長し、アンデスの915万ペソの倍以上の数字を記録している。しかも、アンデスでは造幣所がポトシとリマの2カ所に分散しているため、刻印が2種類あるのに対して、メキシコは造幣所が1カ所で刻印は単一である。つまり、メキシコ製銀貨の製造枚数は圧倒的に多かった。

これに加えて、1728年の勅令で定められた、機械製造による、縄模様の新デザインをほどこした、信頼性の高い銀貨が最初に造幣されたのが、メキシコであったことも重要である（1732年）。リマでは1750年、ポトシでは1777年に至るまでこの新銀貨はつくられていない。つまり、少なくとも1732年から50年までの18年間にわたって、メキシコ造幣所は信頼度の高い新銀貨を発行する唯一の機関であった。この点も、メキシコ製銀貨の評価を高める結果となった。

以上の検討をまとめると、メキシコ製の8リアル銀貨がアンデス製銀貨よりも高い国際的評価を獲得したのは、ふたつの要因、すなわち17世紀前半から品質が相対的に高かったことと、同世紀末からは発行高も凌駕するようになったことによる、と結論づけることができよう。

## まとめ

これまでの議論から、メキシコ製8リアル銀貨が国際的な流通力を獲得した理由のいくつかは、明確になったように思われる。まずスペイン領アメリカ全体についてみると、銀貨の信頼性は、（1）スペイン領アメリカにおける銀生産量が大きかったこと、（2）生産された銀の相当な部分が硬貨に鑄造されたこと、（3）硬貨の大半が8リアル銀貨であったこと、（4）スペイン本国製の銀貨と比べて質的に安定していたこと、の4点によって生み出されたと言える。いっぽう、スペイン領アメリカ製コインのなかでも、とくにメキシコ製8リアル銀貨の評価が高い原因は、（5）アンデス地域と比較して、早い時期から産出銀が銀貨に加工される割合が高

かったこと、(6) アンデスでは銀採掘量の大きい時期に、硬貨の質的な信頼性を確立できなかったこと、(7) アンデスではふたつの造幣所があったのに対して、メキシコは造幣所がひとつであり、単一の造幣所としては発行量が突出しており、知名度が高かったこと、(8) アンデスよりも早く造幣技術の革新をおこなったこと、などが挙げられる。以上の点から、ポトシ製よりも、メキシコ製の8リアル銀貨のほうが、圧倒的に認知度と信頼度が高かったといえる。

18世紀になると、このメキシコ製8リアル銀貨には、その存在感を強める力と、弱める力の両方が働いている。強める力は、銀採掘量の増加にともなう貨幣発行量の大规模な拡大、機械化による硬貨の規格化や品質的な安定である。いっぽう、弱める力は3度にわたる純度の引き下げである。このどちらの力が強く働いたのか、この点については、硬貨を受容する側の評価について検討する必要がある、今後の課題であろう。

では、いま掲げたようなメキシコ製8リアル銀貨の信頼性を支えた諸要因はその後どうなったのだろうか。反植民地政府運動が始まり、やがてメキシコをはじめとする複数の独立国を誕生させていく過程、あるいはその後各国が国家建設をおこなうなかで、信頼性は維持されたのかどうか。この点について検討を加えないことには、19世紀のメキシコドルの流通力を説明することはできない。次回掲載の部分では、この点について検討を加えてみたい。

#### 参考文献

- Brown, Kendall W. *A History of Mining in Latin America: From the Colonial Era to the Present*. University of New Mexico Press, 2012.
- Burzio, Humberto F. *Diccionario de la Moneda Hispanoamericana*. 3 vols. Fondo Histórico y Bibliográfico de José Toribio Medina, 1958.
- Céspedes del Castillo, Guillermo. “El real de a ocho, primera moneda universal.” *Acta del XIII Congreso Internacional de Numismática*, 2005: vol. 2, pp. 1751–1760.
- Céspedes del Castillo, Guillermo. *Las Casas de Moneda en los Reinos de Indias*. Vol. I. Museo Casa de la Moneda, 1996.

- El Real de a Ocho. Primera moneda universal.* Fomento Cultural Banamex, 1976.
- Gil Bautista, Rafael. *Las minas de Almadén en la Edad Moderna.* Universidad de Alicante, 2015.
- Giraldez, Arturo. *The Age of Trade. The Manila Galleons and the Dawn of the Global Economy.* Rowman & Littlefield Publishers, 2015.
- Lane, Kris. "Corrupción y Dominación Colonial: El Gran Fraude a la Casa de la Moneda de Potosí en 1649." *Boletín del Instituto de Historia Argentina y Americana "Dr. Emiliano Ravignani."* Tercera serie, núm. 43, segundo semestre, 2015, pp. 94-130.
- Lazo García, Carlos. *Economía colonial y régimen monetario. Perú: Siglos XVI-XIX.* Banco Central de Reserva del Perú, 1992.
- León, Nicolás. *La moneda del general insurgente José María Morelos. Ensayo numismático.* Gobierno de Morelos, 1897.
- Muñoz Serrulla, María Teresa. *La moneda castellana en los reinos de Indias durante la Edad Moderna.* Universidad Nacional de la Educación a Distancia, 2016.
- Munro, John. "The Monetary Origins of the 'Price Revolution': South German Silver Mining, Merchant-Banking, and Venetian Commerce, 1470-1540." Dennis Flynn, Arturo Giraldez and Richard von Grahn eds. *Global Connections and Monetary History, 1470-1800.* Ashgate Publishing, 2003, pp. 1-34.
- 小野一一郎『近代日本幣制と東アジア銀貨圏 円とメキシコドル』ミネルヴァ書房、2000年。
- Ortiz Peralta, Rina. "Las Casas de moneda provinciales en México en el siglo XIX." José Antonio Bátiz Vasquez y José Enrique Covarrubias eds. *La moneda en México, 1750-1920.* Instituto Mora, 1998, pp. 131-154.
- Randall, Robert W. *Real del Monte: A British Silver Mining Venture in Mexico.* University of Texas Press, 1972.
- Romano, Ruggiero. *Moneda, seudomonedas y circulación monetaria en las economías de México.* Fondo de Cultura Económica, 1998.
- Romero Sotelo, María Eugenia. *Minería y guerra. La economía de Nueva España, 1810-1821.* El Colegio de México, 1997.
- Seeger, Martin L. "Media of Exchange in 16 th Century New Spain and the Spanish Response." *The Americas*, Vol. 35, No. 2 (Oct. 1978), pp. 168-184.
- Sumner, W. G. "The Spanish Dollar and the Colonial Shilling." *The American Historical Review*, Vol. 3, No. 4 (Jul., 1898), pp. 607-619.
- Tepaske, John J. (edited by Kendall W. Brown). *A New World of Gold and Silver.* Brill, 2010.
- Von Grahn, Richard. *Fountain of Fortune: Money and Monetary Policy in China, 1000-1700.* University of California Press, 1996.
- Vilaplana Persiva, Manuel. *Historia del Real de a Ocho.* Murcia: Ediciones de la

Universidad de Murcia, 1997.  
 VV.AA. *Diccionario Universal de Historia y de Geografía*. Vol. 5. Mexico, 1854.  
 Ward, H.G. *Mexico in 1827*. Henry Colburn, 1828.

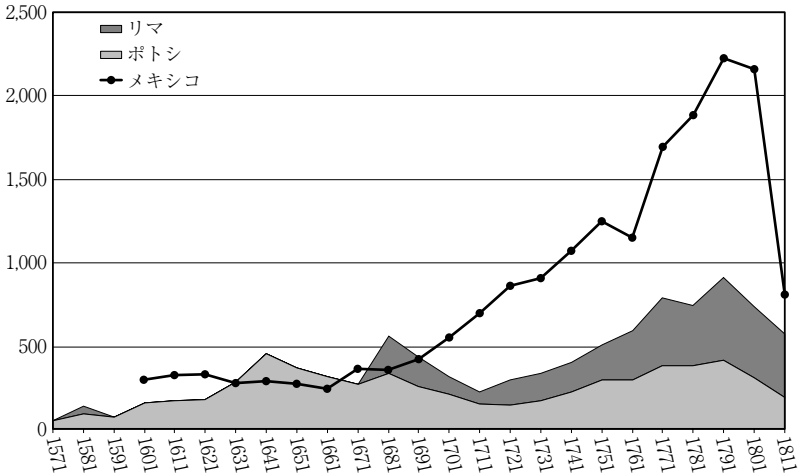


図1 3造幣所の年平均銀貨発行額 (単位: 万ペソ)  
 [Céspedes del Castillo 1996] より作成

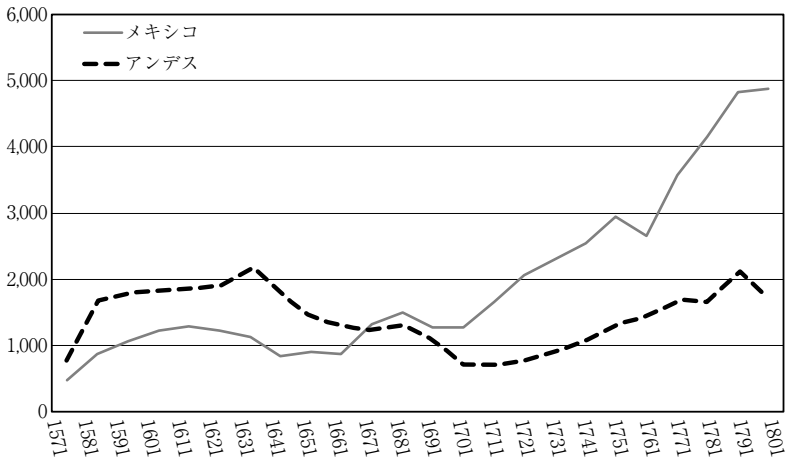


図2 メキシコおよびアンデスの10年ごとの銀生産量 (単位: トン)  
 [Tepaske 2010] より作成



図3 1607年製造の8レアル銀貨

いわゆるマクキナ銀貨。手製で、正確な円形ではなく、打刻もずれている。

表面(左): 中央に王家の盾形紋章, その上部に王冠が配置されている。紋章の右側には8レアルを表す「8」、左側にメキシコ造幣所を表す「M (の上に小さなO)」とその下に検査者のイニシャルを示す「F」が刻印されている。周縁部の文字は「PHILLIPPVS・III・DEI・G・1607 (フェリペ3世・神の恩寵・1607年)」

裏面(右): 中央にエルサレムの十字架, その周りの四象限には「カステーリャ・イ・レオン」を示す「城」と「ライオン」が1対ずつ配置されている。周縁部の文字は「HISPANIARVM ET INDIARVM REX (スペインとインディアスの王)」

図像は American Numismatic Society のデータベースからの転載である。



図4 1754年製造の8レアル銀貨

1728年の幣制改革による造幣機械製で、ほぼ円形。デザインから「円柱」タイプ、また側面に縄模様があるため「縄」タイプと呼び習わされる。

表面(左): 中央に王家の盾形紋章, その上部に王冠を配置。紋章の右側には8レアルを表す「8」、左側にメキシコ造幣所を表す「M (の上に小さなO)」とその下に検査者のイニシャルを示す「F」を刻印。周縁部の文字は「FERDND VI D G HISPAN ET IND REX (フェルナンド6世・神の恩寵・スペインとインディアスの王)」

裏面(右): 中央に、戴冠した両半球が海に浮かび, その両側にはヘラクレスの柱に「PLUS ULTRA」の評語。周縁部は「VTRAQUE VNUM (両方は1つ)」と製造年場所。

図像は American Numismatic Society のデータベースからの転載である。



図5 1784年製造の8レアル銀貨

1771年の幣制改革による。デザインから「胸像」タイプと呼ばれる。純度は低め。表面（左）：中央に古代ローマ風の国王の横向きの胸像，周縁部の文字は「CAROLUS・III・DEI・GRATIA・1784・（カルロス3世・神の恩寵・1784年）」裏面（右）：中央に王家の盾形紋章，その上部に王冠を配置。その両側にはヘラクレスの柱に「PLUS ULTRA」の評語。周縁部の文字は「・HISPAN・ET・IND・REX・M・8R・F・M・（スペインとインディアスの王）」と製造所，額面8レアル，検査者のイニシャル。

図像は American Numismatic Society のデータベースからの転載である。



図6 1808年製造の8レアル銀貨

1786年の秘密の幣制改革による造幣機械製。表面の胸像がカルロス4世になったた以外にデザインの変更はない。しかし，図5のものとは比べて，純度が約7パーミル減じている。

図像は American Numismatic Society のデータベースからの転載である。